

日常生活と聖書

講座の方法 対面式

講師 シスター岩井 慶子（聖心会）

受講料 6,000 円

日程 水曜日 10：30～11：30

10月16日 11月13日 12月18日

1月15日 2月12日 3月12日

聖書学の勉強ではなく、講座名の通り、3人の担当者が、日常生活の中でふと気づいたこと、励まされたこと、安心したことなど主観的にお伝えする気軽な講座です。

参加の皆様の自由な反応やご意見もお互いの理解を広げます。正解というのはなく、また発言しない自由も十分あります。

聖書の使用箇所は担当者がそのころの日常生活から考えて決めてお知らせしますが、聖書は用意してありますので、お持ちでなくても大丈夫です。内容に継続性はないので、どの段階での参加も可能です。



キリスト教への招きⅨ

講座の方法 対面式

講師 宮越 俊光（カトリック中央協議会）

受講料 9,000 円

日程 土曜日 14：00～15：30

- 第5回 10月 5日 わたしは神のひとり子イエス・キリストを信じます①
- 第6回 10月 19日 わたしは神のひとり子イエス・キリストを信じます②
- 第7回 11月 16日 わたしは神のひとり子イエス・キリストを信じます③
- 第8回 1月 11日 わたしは聖霊を信じます①
- 第9回 2月 8日 わたしは聖霊を信じます②
- 第10回 3月 8日 まとめー「アーメン」

※前期からの連続講座ですが、途中回からのご受講も問題ございません
 ※講師の都合により日程が変更になる場合があります

第9期となる2024年度は、「信条」に基づいてキリスト教について学びます。「信条」とは、信者がともに宣言することができるよう、信仰の本質的な内容を簡潔にまとめた定式文です。父と子と聖霊である神への信仰を告白するかたちをとり、初期キリスト教の時代からさまざまなものが作られました。なかでも、4世紀に成立した「ニケア・コンスタンチノーブル信条」と呼ばれるものは、今日に至るまで、東方教会と西方教会の信仰の共通の礎となっています。今期はこの信条に基づいて解説していきます。

この講座では、カトリック教会の立場から、信者ではない方にもできるだけ分かりやすくお話いたします。これまでの講座を受講していない方も歓迎します。

禁忌の恋はどう語られたか －藤壺の物語を読む（「須磨」巻②）－

講座の方法 オンライン (Zoom)

講師 大津 直子 (同志社女子大学 准教授)

受講料 7,500 円

日程 火曜日 13:00 ~ 14:30

- 9月24日 昨年度までの振り返り、ご質問への回答
- 10月 1日 須磨での暮らしぶり
- 10月 8日 女性たちとの文の遣り取り①
- 10月15日 女性たちとの文の遣り取り②
- 10月22日 朧月夜の動静と憂愁の日々

光源氏とたった五歳しか変わらない継母・藤壺の存在は、光源氏の人生を、あるいは『源氏物語』の正編全体を貫く重要な軸です。

しかしながら、戦前谷崎潤一郎訳『源氏物語』において藤壺の登場箇所が削除されたことが象徴するように、皇統乱脈を描く光源氏と藤壺との恋は時代の流れの中で忌避されることもありました。果たして物語はどのように禁忌の恋を語っているのでしょうか。

本年度は、光源氏の須磨における蟄居の日々を読んでいきます。

講座の中では従来通り、貴族たちの生活世界をイメージしていただけるように画像資料を用います。受講者の皆様が平安朝の世界を心の中に思い描きながら原文を味わってくださるよう努めます。また、途中回からのご参加や講座内容に関するご質問も大歓迎いたします。オンライン講座ですが、双方向のやりとりとなるよう工夫したいと思っております。なお、本年度は講師の都合により開講回数を削減いたしますことをご了承ください。

『大和物語』を読む

講座の方法 対面式

講師 山口 佳紀（聖心女子大学 名誉教授）

受講料 15,000 円

日程 金曜日 10：30～12：00

- 第1回 10月18日 『大和物語』を読むために（第一三九段「芥川」）
 第2回 11月 1日 第一一段「住の江の松」・第一二段「春の夜の夢」
 第3回 11月15日 第一六段「忘れ草」・第一七段「なびく尾花」
 第4回 11月29日 第二一段「もりの下草」・第二二段「染革の色」
 第5回 12月13日 第二五段「ちとせの松」・第二六段「忍ぶ恋」
 第6回 1月24日 第二九段「をみなへし」～第三四段「この花」
 第7回 2月 7日 第六六段「いなおほせ鳥」～第六八段「葉守の神」
 第8回 2月21日 第一四〇段「草枕」
 第9回 3月 7日 第一四六段「鳥飼院」
 第10回 3月21日 第一五〇段「猿沢の池」・第一五一段「紅葉の錦」

『大和物語』は、『伊勢物語』と並び称される歌物語の一つであり、平安時代の貴族社会で語られていた恋愛譚や古伝説などを紹介する作品です。我々は、これを読むことによって、平安貴族の興味が何に注がれていたか、また彼らの築いた文化がどのようなものであったかを、如実に知ることができます。ただし、この作品は有名である割に注釈書が少なく、内容が十分には理解できていないのが現状です。

この講座では、その各章段を丁寧に読み解きながら、表現の真意を突き止め、文章の魅力を楽しみたいと思います。

—日本・東洋文化探訪シリーズ第八弾—

西域仏教美術入門

講座の方法 対面式

講師 中野 照男（東京文化財研究所 名誉研究員）

受講料 4,500 円

日程 木曜日 13:00 ~ 14:30

第1回 10月17日 キジル石窟壁画の仏伝図
—伝記から法の偏在という主題の変容—

第2回 10月31日 石窟壁画に描かれた多様な音楽場面
—その図像的分析—

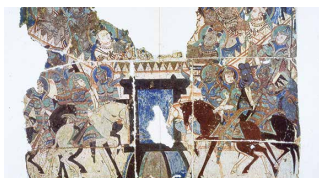
第3回 11月14日 壁画を彩る顔料と色料
—使用例にみる地域的特徴に注目して—

西域美術を味わう方法はたくさんあります。今回は、図像学的なアプローチと材料の解明から、それを試みましょう。

図像としては、釈尊の生涯（仏伝）と音楽場面を取り上げます。クチャ地域の石窟壁画においては、石窟造営の初期と造営が盛んに行われる盛期では、壁画の様式にさまざまな変化が見られます。仏伝図の画題の選択が、まさにこの様式の変化と連動しています。前期では、釈尊の事跡そのものに関心が強いのですが、盛期では釈尊が法を説く場面とその説かれた法に関心が集中します。何故そのような変化が現われたのでしょうか。釈尊の事跡をお手本に、修行に関心をもった段階から、釈尊の説いた法によって救われないという救済願望へと変化したのではないかと私はみています。

音楽場面も、仏伝の一場面であると言っても構いません。基本的には、釈尊が法を説いている場面に添えられて、天や神々が釈尊を讃歎し、供養している情景です。さまざまな天や神が登場します。楽器の種類も多様です。誰が、どのような場面で、いかに釈尊を讃えているのか、その場面を丹念に拾い出して、検証してみましょう。どのような音を奏でたのか、興味がわきます。少なくとも現代のウイグル族が奏でる音色とはかなり違ったようです。

壁画の材料としては、無機の顔料と有機の色料をとりあげます。壁画には、これら多彩な顔料と色料が巧みに使われています。まずは、壁画の多彩な色彩を支えている顔料や色料を概観してみましょう。各地で使われる顔料や色料に大きな違いはありませんが、地域や時代によって、その使い方に違いが現われます。各地、各時代で使われた顔料や色料の色味をスライドで確認しましょう。



キジル石窟 分舍利図（ベルリン・戦災で焼失）
出典：Alt-Kutscha



キジル石窟第38窟 右壁の伎楽天
出典：『中国石窟 キジル石窟一』図93

—日本・東洋文化探訪シリーズ第九弾—

水墨画の魅力：雪舟・等伯から宗達・応挙そして大観へ

講座の方法 対面式

講師 島尾 新（美術史家・学習院大学 元教授）

受講料 3,000 円

日程 水曜日 13:00 ~ 14:30 2025年1月15日 1月29日

水墨画の幅広さ

水墨画の世界は幅広くヴァリエーションに富んでいます。鉛筆やペンが使われるようになる前は「なにを書くにも筆と墨」でしたから、子供の落書きもいってみれば水墨画でした。その一方で「黒」は、ものごとの本質を象徴する色であり、画家は世界の根源を表現しようともしています。墨と筆という身近でシンプルな画材によって、白い画面にさまざまなものを浮かび上がらせ、ときに色彩をも感じさせる。誰でもが気楽に描け、しかし窮めようと思えば奥深い。それが水墨画です。

日本の水墨画

日本で描かれるようになるのは鎌倉時代。禅僧たちが中国の水墨画を真似て描き出します。室町時代には大きく発展して、力強い筆致で山水画を描く雪舟や、逆に繊細で静かな画風の相阿弥、また独特の形態感覚とユーモアをもつ雪村などが出てきます。それをさらに日本に馴染ませたのが、城郭に豪快な襖絵を描いた狩野永徳や、単純化によって「わび・さび」を表現した長谷川等伯。そして江戸時代になると、余白を生かした狩野探幽や、「たらし込み」を編み出した俵屋宗達など、中国にはない表現をする画家が出始めて、さらに円山応挙・長澤蘆雪・伊藤若冲らによって多彩な表現の世界が花開いてゆきます。

その特徴は、中国の水墨画がダイナミックかつ自在な筆の動きで、迫りに満ちているのに対して、素直でシンプルな線と柔らかな墨の滲みやきれいな墨の面が活かされて、なにか優しさやユーモアを感じさせること。「筆の中国、墨の日本」と呼んでいるのですが、それは近代にも繋がって、菱田春草や横山大観の「朦朧体」には筆の迹は見えません。

この講座ではそのような日本の水墨画の魅力を、歴史を辿りまた中国と比較しながら紹介し、あわせて日常の風景から消えつつある「筆と墨」の文化を見直してみたいと思います。



雪舟・秋冬山水図(冬景)
東京国立博物館

出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

—日本・東洋文化探訪シリーズ第十弾—

中国陶磁の世界

講座の方法 対面式

講師 今井 敦（東京国立博物館 特任研究員）

受講料 3,000 円

日程 木曜日 13:00 ~ 14:30 10月10日 12月12日

本講座ではおよそ時代順に、中国陶磁史の流れを概観し、中国陶磁の魅力について解説いたします。後期講座は元時代から清時代までの陶磁器を取り上げます。元時代後期の14世紀に江西省の景德鎮窯において、白磁の素地にコバルトを含んだ顔料を用い筆彩で描くことにより、鮮やかな藍色の文様を表す青花（染付）の技法と様式が完成されたことにより、中国陶磁史は大きくその様相を変えます。これ以後、絵付けを施した磁器が主流となり、明時代になると宮中の御用品を焼く官窯が景德鎮に置かれ、質の優れた陶磁器の生産は景德鎮に集約されてゆきます。

明時代には、白磁あるいは青花をいったん高温で焼成したのち、上絵具で文様を描き、錦窯と呼ばれる小型の窯で焼き付ける釉上彩の技法がしだいに盛んになり、絵付けの技法は高度化、複雑化してゆきます。釉上彩は多色を用いることができる利点があり、また鮮やかな赤が目立つことから、五彩、色絵、赤絵とも呼ばれます。明時代後期に景德鎮窯の生産は大きな発展を遂げ、官窯、民窯ともに華麗な色彩美を誇る作風が展開します。明時代末期になると、度重なる戦役などによる財政の破綻により官窯は閉鎖されますが、古染付、祥瑞、南京赤絵など、民窯で焼かれた多種多様な磁器が国外に向けて輸出されました。

清時代になると、官窯の制度が整備され、さまざまな技法や釉薬が新たに開発されて、王朝の最盛期である康熙、雍正、乾隆の三代には超絶的な技巧による精美な磁器が作られました。しかし、ヨーロッパ勢力の侵略により国力が衰退してゆくと、官窯はしだいに退廃の様相を濃くしてゆき、ついには民営化されてその歴史に終止符を打ちます。

最後に、中国の陶磁器から大きな影響を受けながら展開してきた日本の陶磁器と比較することにより、両者の共通性と独自性について見てゆきます。



青花束蓮文大皿 景德鎮窯 明時代
東京国立博物館

出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

王朝の美、国風文化への誘い④

平安の書と装飾料紙

講座の方法 対面式

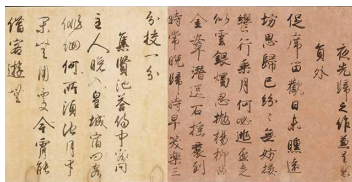
講師 金子 馨 (出光美術館 学芸員)

受講料 3,000 円

日程 水曜日 13:00 ~ 14:30 11月20日 12月4日

平安の書 —— 三筆・三跡を中心に

中国の模倣から始まる日本の書の歴史ですが、奈良時代には書聖・王羲之をはじめとして、唐人の書を鑑賞したり、手習いしたりする様子がかがえます。そして平安時代に入ると、他の分野同様に日本的な変化を見せながら発展してゆきます。とりわけ平安時代中期に活躍する小野道風・藤原佐理・藤原行成の筆跡（三跡）にその特徴があらわれているとされ、その様相を「和様」と呼んでいます。本講座では、中国の書法がどのような変化が見られるのか、三筆や三跡の書を取り上げて考えてみたいと思います。



国宝 白氏詩巻 藤原行成 寛仁2年(1018)
東京国立博物館

出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

平安の装飾料紙 —— 仮名の美しさ、紙の美しさ

漢字から生まれた仮名ですが、和歌の隆盛とともに発展する様子がかがえます。仮名の白眉とされる「高野切古今集」などを代表格に平安時代中期には造形的な完成も見られ、平安時代後期にはさらに円熟して多様な表現があらわれます。これらの書の名品は「古筆」と呼ばれますが、書表現ばかりでなく、美しい装飾料紙に揮毫されることで多くの人の眼を愉しませています。本講座では平安時代の古筆を通じて、平安貴族の美意識に触れるとともに、仮名や料紙の美しさに迫りたいと思います。



国宝 元永本古今和歌集 藤原定実 元永3年(1120)
東京国立博物館

出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

【ご案内】 出光美術館の軌跡 ここから、さきへⅣ
物、ものと呼ぶ一伴大納言絵巻から若沖へ

2024年9月7日(土)～10月20日(日)

※国宝「伴大納言絵巻」のほか平安時代の古筆も出品されますので、ぜひご来場ください。詳しくはウェブサイトをご覧ください。



特設サイトURL

王朝の美、国風文化への誘い⑤

平安の漆工

講座の方法 対面式

講師 福島 修（東京国立博物館 特別展室主任研究員）

受講料 3,000 円

日程 木曜日 13:00～14:30 11月21日 12月5日

かぐや姫に求婚した五人の貴公子のうち、龍の頸の珠をとってくるように言われた大納言・大伴御行の顛末を覚えていますでしょうか。大納言は、臣下にこの珍宝を「命を懸けて探せ」と命じるや、これを入手する前から姫を妻に迎えるための下準備をはじめます。漆を塗って蒔絵で飾った壁を作り、屋根の上には染糸で様々な色に葺かせるなど、極度に贅を尽きた豪華な家を建てるのです。これが徒労に終わることはご存じのとおりですが、ここで注意したいのは「まき糸」という言葉が用いられていることです。漆の接着力を利用して、金属粉を蒔くことで装飾する技法「蒔絵」の語が用いられたのは、史料の上ではこの場面が初出です。名前が登場したということは、それだけこの技法に対する認知度が向上しているということでもあります。技法的な確立の指標が、ここに伺えるのです。

しかし、ウルシノキに傷をつけ、滲み出た樹液を少しずつ掻き集めなければならぬ漆を大量に使用し、製粉技術が未熟なため大きく荒い金粉を蒔くしかない平安時代の蒔絵は、ごく一部の特権階級が享受する高級品でした。『竹取物語』が成立した10世紀頃、蒔絵で家屋を飾るような行為は常軌を逸した贅沢だったと考えるべきでしょう。

平安時代前期の蒔絵は「初期蒔絵」と呼ばれます。現存作例はほとんどが密教と関連するものであり、その全体像をとらえるには信仰の姿を理解する必要があります。飢饉や疫病が頻発すると、人々は災害から逃れるため多種多様な信仰に縋りました。特に貴族は超自然的な靈感を極度に恐れ、またその栄達が運に左右される面が大きく、生活全般が何らかの信仰に強く彩られていました。平安時代後期には末法の到来とともに法華経信仰が貴族に浸透し、いたる所に仏教的なイメージが湧出します。一見すると仏教的とは思えないモチーフであっても、経意にかかわる寓意が込められる例も見られます。ひとつのデザインから受ける印象は、当時の共通理解に沿ってみるとまったく違う姿に見えてくるかもしれません。

本講座では、平安時代の「蒔絵」に焦点をあて、その技法の確立と発展の流れを、現存作例を詳細に分析しながら見ていきます。蒔絵がいかにして日本の代表的な漆芸技法となっていくのか、皆さんと一緒に考えてみたいと思っています。



国宝 片輪車蒔絵螺鈿手箱 平安時代・12世紀
東京国立博物館

出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)